

破産 クレジット

玉木英治

Eiji Tamaki

CREDIT



講談社
文庫
講談社

〔著者〕玉木英治 1929年、福井県生まれ。旧制第三高等学校卒業。衆議院議員秘書などを経て消費者金融会社を創業、消費者信用分野の矛盾を体験する。1969年、消費者信用情報センターC.C.C. (株式会社コンシューマ・クレジット・クリアランス) を設立。1976年、消費者信用分野に発生する大量の延滞債権の合理的な調査・管理のためのクレジット債権管理組合構想を抱き、有志と共に組合を発足させ、コンサルタントに就任。あらゆる消費者信用債権の調査に当たる。1991年、アメリカン・コレクターズ・アソシエーション(ACA)の理事に就任。現在、クレジット債権管理組合コンサルタント、(株)C.C.C.取締役社長を兼任。著書に、『サラリーマンの消費者ローン』(麴町書房)、『ローン破産』『クレジット・パニック』(創知社)がある。

クレジット^{はさん}破産

たまき えいじ
玉木英治

© Eiji Tamaki 1993

1993年11月15日第1刷発行

1994年3月28日第4刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185534-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

クレジット破産

英治 坂本

講談社

まえがき

著名な作家、高杉良氏とひよんな事からお知り合いになり、彼の力作『欲望産業』の取材に協力してから一〇年近くたちました。当時、わたしは『ローン破産』『クレジット・パニック』等を著し、クレジット社会の将来に危惧と警告を言いつづけていました。

消費者金融の現場から、多発する不払者に数多く接し、彼らから、どうして貸付けたお金を返済してもらうか、さらにはどうして不払い者に貸付けしないですむか、毎日考え悩んでいるうちに、クレジットの先進国、アメリカに学ぶことを思い立ちやみくもに旅立ったのです。そしてアメリカで見たものは目を見張るような法的規制と消費者保護を中心とした体制の整備でした。その中心をなすものは消費者信用情報のデータ・バンクと回収のためのネットワークであったのです。この二つが分ち難くドッキングしているのです。

わたしが永年の間、求めていたものは「これだ」と目の洗われるような思いにとらわれたのを鮮明に思い出します。日本へ帰って、この事にとりかかべく、友人、知人を頼って説得し、零からの出発を開始したのです。

しかし、それからの二〇年、悪戦苦闘の連続でした。「指一本で芝増上寺の鐘を動かすんだ」と自分自身に言い聞かせての東奔西走でしたが、世の中の無理解もあり、何度も何度も挫折しそ

うな己を鞭打つ毎日でした。その中の最大の障壁は「日本では他人の債権を回収することを業とすることは、弁護士しかできない」という弁護士法の壁でした。

高杉氏は、その折りの苦闘を今回「座礁」という新聞小説に連載を始められ、そのための取材をたびたび受けているうちに、昔の著書『ローン破産』『クレジット・パニック』を読み返すことになったのです。高杉氏の小説に出てきますが、不払いを起こした債務者をたずね事情を聞く、「ローラー」という仕事わたしは大好きです。

苦しい時、悲しい時、絶望にとらわれた時私は、その軛から逃れるため「ローラー」に出たものでした。仕事の性質上「弱者攻撃」をしているのではないかという後ろめたさからと、彼らの実態に触れたいという希望から始めたものでしたが、いつのまにか、誰からも相手にされない苦しみと孤独をなくさめ、勇気を奮い立たせ、喜びにかえてくれる唯一のものにさえなったのです。

不払い者といわれる彼らと接して、彼らの悩み苦しみがわかり、そして彼らのために微力をつくすことができる喜び、しかも、そのことが消費者もクレジット業者も社会も共に繁栄していく唯一の道なのだと、確信できるその瞬間は何ものにもました醍醐味であることは、いつまでも変わらぬと思います。

そんな思いの「ローラー」で、先日埼玉県川口市方面へ出かけた時のことです。一人は初老の男性でした。その人がいるため、取り壊しての建て替えができないと言わんばかりのもうくず

れ落ちそうなアパートに、一人だけ居住していました。生活は荒れ放題、もう人間の生活ではありません。この人にもかつて妻子もあつたろうに、希望を夢みた生活もあつたろうに、誰がこうしたのでらうと、考えさせられました。

もちろん本人にも問題があることは原因の大部分であろうけれども、お金を貸したり、先払いで品物を買う制度がなかったら、キャッシング・デリバリーの社会だったら、今のクレジット社会でも、クレジットを与えてはいけない人、お金を貸してはいけない人とそうでない人を見分ける信用情報のデータ・バンクが整っていたら、ここまで窮迫の状態にならなかつたに違いないと思うのです。負担しきれない負債と高金利に膏血をあますことなく絞り取られ、希望と人生を奪い取られた廃人にみえてしかたがありませんでした。

「お客さまを不幸にする事業は長続きしない」と渋沢栄一さんは言いました。個人や家族を繁栄させ福祉を増大させるはずのクレジットが、このような廃人を作つてよいわけはありません。一〇年前と今、クレジットを巡る環境は少しも変わっていません。むしろ、クレジットがあるため、貧富の差を一層拡大していると思われてなりません。そのため、一〇年前に発したわたしのささやかな警告が、今もそのまま生きているのにはわれながら驚くばかりです。

一九九三年夏

玉木英治

目次

まえがき 3

第一章 悪夢——ローン、クレジットの社会病理 11

1 マイホーム無惨 12

2 狂いはじめた消費感覚 32

第二章 ローン漬け社会 45

1 無計画にローンを組む 46

2 多発するローン犯罪 60

3 目前に迫るクレジット・パニック 78

第三章 名誉ある転身 85

1 消費者金融の欠陥 86

2 悲劇を繰り返すな 94

第Ⅳ章 招かれざる客——債権調査員 109

1 支払停滞者の素顔 110

2 回収のノウハウとは 129

3 たよりにならない裁判所 154

第Ⅴ章 データ・バンクへの道 167

1 不良債権の増加を防ぐために 168

2 消費者信用情報とはなにか 180

3 現実的な債権回収の仕組み 195

第Ⅵ章 クレジット時代の生き方 207

1 消費者の知恵 208

2 ローン、クレジットに失敗しないコツ 216

クレジット破産

第一章 悪夢——ローン、クレジットの社会病理

1 マイホーム無惨

マイホーム完成直前に一家五人が無理心中

円高による不況の影響は、賃金上昇を見込んでいた勤労者の家計にひととき大きな打撃を与えた。とくに、住宅ローンのように大型の長期債務をかかえたものにとっては、物価上昇分にも満たない昇給という見込みはずれのために、たちまち返済に苦しめられることになった。こうして、不況が長びくにつれて、マイホーム心中事件が相次いだ。

なかでも、山口県下で起こった一家五人心中事件は、現代のローン、クレジット社会の矛盾を余すところなくみせつけた象徴的な事件だった。

事件は、四二歳の会社員が就寝中の妻子四人を絞殺し、その遺体をマイカーに乗せて人気のない郊外の崖に車ごと激突し、心中をはかったというものである。調べによると、この会社員は二階建てのマイホームを新築中で、二カ月前に棟上げしたばかりだった。そして、日曜日ごとに夫婦で見にきてはあれこれ指図をし、年末の完成を楽しみにしていたという。住人を失ったこの未完成の家は、広さ約一〇〇平方メートル、台所をふくめて六間（五DK）という立派なつくりだった。この家のために、会社や住宅金融公庫などから一八八〇万円を借りており、月々の返済が

約一〇万円得手取り給与は三〇万円、生活はかなり苦しかったらしい。

「一生懸命生きてきたが疲れた」という遺書を残して死んでしまった一家の、ほんとうの事情はわからないが、念願のマイホームの完成を待たずに疲れ果ててしまふ、その見通しの甘さをどう理解したらよいだろうか。

わたしが象徴的だというのは、まさにその見通しの甘さである。マイホーム、マイカーが庶民の生活の究極の夢とされるような時代風潮にも問題があるが、それを助長するような住宅ローン制度そのものにも問題がある。もし、会社が金を貸さなかったら、住宅金融公庫が融資を断っていたら、中学一年の長女を頭とする三人の子どもたちは、無邪気にはしゃぎ回っていたかもしれないのである。

団地から一戸建のマイホームに移って一年足らずで、わが家に火を放って子どもを道づれに無理心中した若妻があった。夫は小学校の夜警で、給与の全額を充てても返済金に足りなかった。

だが、これなどは氷山の一角にすぎない。ローン返済のための主婦パート労働は少しも珍しいことではない。そして、家計は張りつめたゴム風船のように、つねに限度いっぱいである。万一のことがあれば、あるいは主婦の病氣、夫の失職、子どもの進学というような小さな衝撃波であっても、張りつめた風船を破裂させるには十分である。

なんとかしなければ、という気持ちのあせりが、つい手近な消費者金融へと誘いこまれる。穴埋めのために掘った穴を、さらに埋めなければならぬ。こうして、借金返済のために、また借

金へと自転車操業が始まる。スピードが増せば増すほど、借金の額が大きくなっていく理屈である。

「なんとかなるさ」が破滅を招く

住宅ローンさえなかったら、と気づいたときにはすでに遅いのである。建てたマイホームという担保があるからといって貸し付け側は借りる側の返済能力を甘くし、無理な住宅ローンを組ませ、そのごちそうを食べすぎてトン死した人間を、誰があざ笑ったり、非難できるだろうか。担保が効力を発揮するのは、実際はその家を手放すときである。手放すのがいやさに、借金を重ねるといふのは、それだけ家への執着の強さを物語っている。それはそれでよかろう。

しかし、見逃せないのは巻添えをくった子どもたちのことである。彼らの未来を思うとあわれでならない。将来、この子たちが国家、社会、そして我々日本民族のための有能な働き手やリーダーにならなかったとは言いきれない。極言すれば、無理なマイホーム建設に手をかけた金融機関が我々の宝である子どもたちを殺した、といえないこともないのだ。

いったん過重債務をかかえ、借金返済のための借金が始まると、あとは坂道を転げる雪だるまのようなものだ。消費者金融間のタライ回し、主婦売春、離婚、蒸発……週刊誌がことさらエキセントリックに書き立てるような事例は、わたしが遭遇しただけでも枚挙にいとまがない。

こうした水面下のローン破産Ⅱマイホーム破産の実例をいくつも目撃してきた。いったい、ど

れだけ悲劇をくり返せば、マイホーム破産を防ぐことができるのだろうか、というのがわたしの偽りのない感想である。政府の住宅政策の貧困を糾弾することはたやすい。また、民間建設業者の目に余る誘惑も否定できない。そして、「マイホーム建設計画」とか「マイホーム資金のつくり方」というようなパンフレットや読みもの記事が、さらに欲望を増幅させる。

手が届きそうもなければ、欲望は激しさをつのらせる。富とか豊かさとかいう社会的ステイタスとしてのマイホームの魅力は、現実が貧しければ貧しいほど誘惑的なものとなっている。しかも、現にマイホームは手の届きそうな目の前に存在しており、手続きさえ踏めば融資を受けるのもさほど困難ではない。

そして、マイホームへの夢が、現実の困難をたわいもないことのように信じ込ませてしまう。そこに危険な落とし穴が隠されていることに気づくはずもない。たとえ兎小屋であろうと、仕組みはほぼ同じである。借りた金はいつかは返さなければならない、けっして少ないとはいえない利子を添えて。

庶民のささやかな夢に水をさすつもりはないが、「マイホームの誘惑にうち勝つ法」とか「ローン破産に陥らないために」、あるいはいつそ「マイホーム失敗実例」など、ありのままの現実を正しく認識させるのが先決ではないだろうか。支払い能力に応じた限度額をあいまいにしたまま、期待と願望だけで可能性を描きだすのは、もっとも危険であることを知らせなければならぬ。